第2次
上条遺跡発掘調査略報

昭和43年12月

山ノ内町教育委員会

はじめに

第1次発掘調査（昭42年3月26日～31日）についで第2次調査を計画し、地主湯本直治氏へ連絡したところ快諾を得、ついに3月29日～31日までの3日間に亘って調査を実施した。

調査

調査責任者	山ノ内町教育長	宮崎　栄
発掘担当者	日本考古学協会員 長野県考古学会委員	金井汲次
調査委員	長野県考古学会員	田川幸生
	〃	小野沢　捷
	山ノ内町教育委員会	滝沢善次郎
	長野県考古学会員	山上右八
	〃	畔上秀雄
	立正大学生	金井正彦
調査協力	高社中学校郷土クラブ	山崎光雄　他
	飯山北高校考古クラブ	中島左一　他
	山ノ内中学校	山上由美雄、畔上輝児
	須坂高等学校	金井文司
	山ノ内教育委員会	荒井かほ子

発掘日誌

3月29日（金）晴　（昭和43年）

上条公会堂に集合し、発掘の趣旨、発掘要領について打合会を行い、ただちに現場へでかけ午前9時30分に作業を開始する。

第1次調査を実施した第1区トレンチの南側へ、それに並行して長さ8m、巾2mのトレンチを設定し　各2mごとに区切った。ポイントの杭打ちを行う。第3トレンチとする。

1号（東より）から3号までに鍬入れをし、地表下10cmずつの層に掘りくぼめた。第3層すなわち30～40cmのところに土器片、石器類があって検出。土器片の中には把手2点（3－3区）　3－2区からは頁岩製半磨石斧、3－1区からは石鏃片（黒曜石）1点、打石斧1点を得た。（頁岩製半磨石斧は長さ約　cm 最大巾約　cm、黄褐色の立派な完形品であったが後遺憾にあってしまった。）

地表下50cmまで掘り下げ午後4時30分作業を終る。

宮崎公民館長と共に地主の湯本直治氏宅へ、本日より発掘調査を開始したとあいさつに行く。

調査　14名

参観　湯本直治氏（地主）　内堀邦平氏（上条区長）

3月30日（土）晴後小雨

9時作業開始。3－1～3－3区は昨日に続く層を更に深く掘りすすめた。3－1からは地表下50～65cmにかけて打石斧を得たが3－2～3－3にかけては遺物を検出することはできなかった。

第4区（3－4）は本日より掘入れを行い地表下30－40cmに土器片類を多く得る。中に把手片1点があった。礫群もあった。

午後は小雨となり作業は困難となったために発掘は中止し、上条公会堂において土器洗いをする。

調査　11名

3月31日（土）　曇後晴後曇

午前9時作業をはじめる。昨日の雨のため3－1～3－3までは粘質土に達していたため深い水たまりができた。ベケツで排水する。

3－4に主力をおいて発掘をすすめると正午頃3個の柱穴状ピットが現われた。その面を追って3－3へ進むと同様のピット3個を検出した。地表下65～93cmでピットの存在する面は床面を思わせるものがあり、積を北側へ傾斜していた。ピットは次のとおりである。

	P6	P7	P8	P9	P10	P11
長径	29cm	17	20	58	42	32
短径	26cm	16	20	40	39	32
深さ	18cm	13	10	31	10	16
地下	70cm	65	58	93	80	88

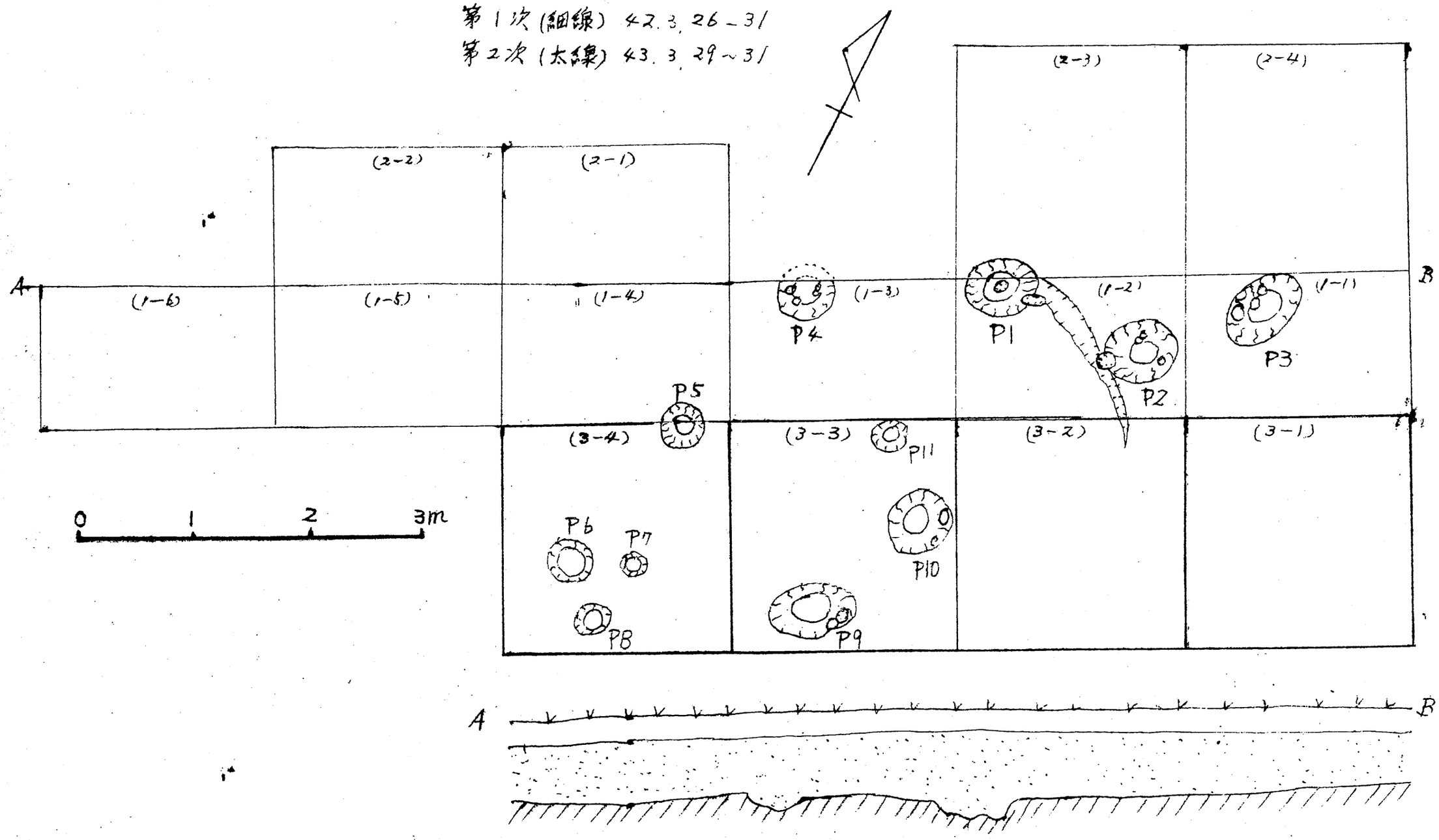
P9からは土器片4点、礫1点、P11からも土器片数点が出土している。

3－1～3－2には表土下70cm前後のところに礫群があった。3－1中央部には焼土、木炭片が少しあった。また東北隅には大形の土器片が地表下70cmから検出した。午後測量をし午後4時3分作業終了

調査　11名　　参観　富岡登氏他

上条遺跡トレンチ図

第1次(細線) 42.3.26～31
第2次(太線) 43.3.29～31



おわり12

1、発掘調査は昭和43年3月29日～31日の3日間にわたり延36人が調査に従事した。

2、発掘面積は18㎡で、地表下1.2mまで掘りくぼめて調査した。

3、表土は約25cm、それに続く黒色土層は約60cmであった。それ以下は褐色粘土質層で、遺物は地表下30cm～90cmの黒色土の中から主として検出された。

4、柱穴状ピット6個を検出したが、住居址のプランは確認することができなかった。

ピットの数値

ピット	P6	P7	P8	P9	P10	P11
地表cm	70	65	58	93	80	88
プランcm	27×26	16×17	20×20	58×52	39×32	30×32

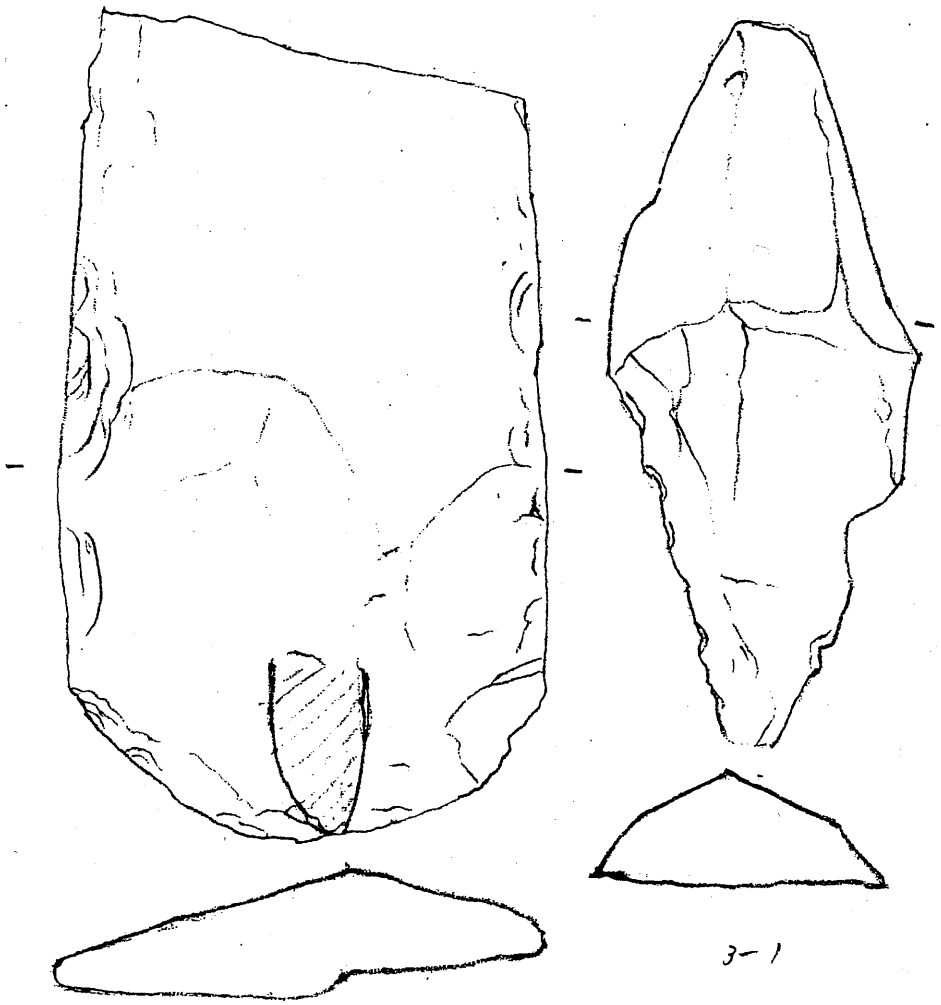
5、遺物は土器片、土製品(縄文管状土錘)石器、焼土、草木灰を発掘した。土器類は形態や文様から縄文中期末から後期初頭にかけてのものであった。

遺物表

	表採	3-4	3-3	3-2	3-1	計
無文土器片	22	14	73	63	92	264
有文土器片	5	5	56	42	29	137
口縁(土器)			6	3	1	10
底部(土器)			2	1	1	4
把手(土器)		1	2		1	4
打石斧			1		4	5
石鏃					1	1
石皿					1	1

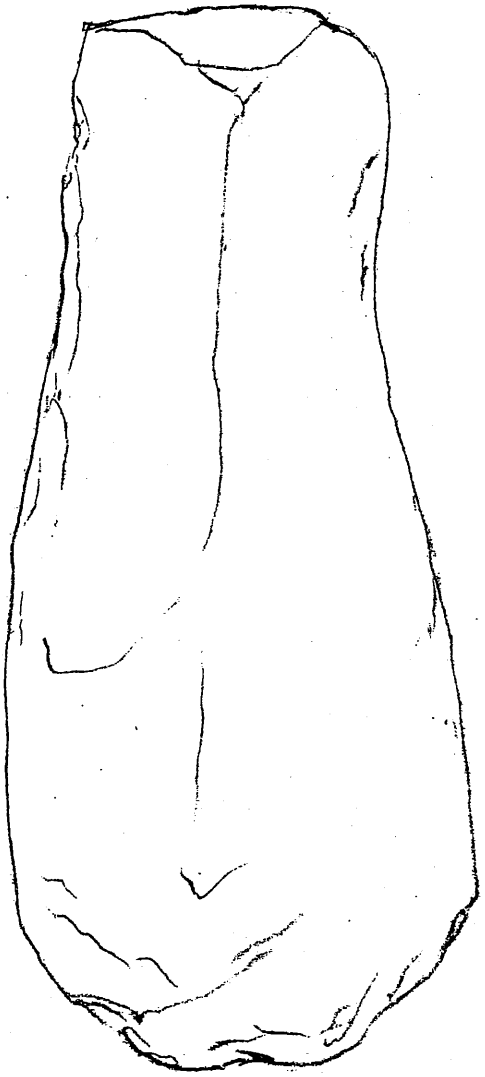
土器片519点

第2次 上垂遺跡



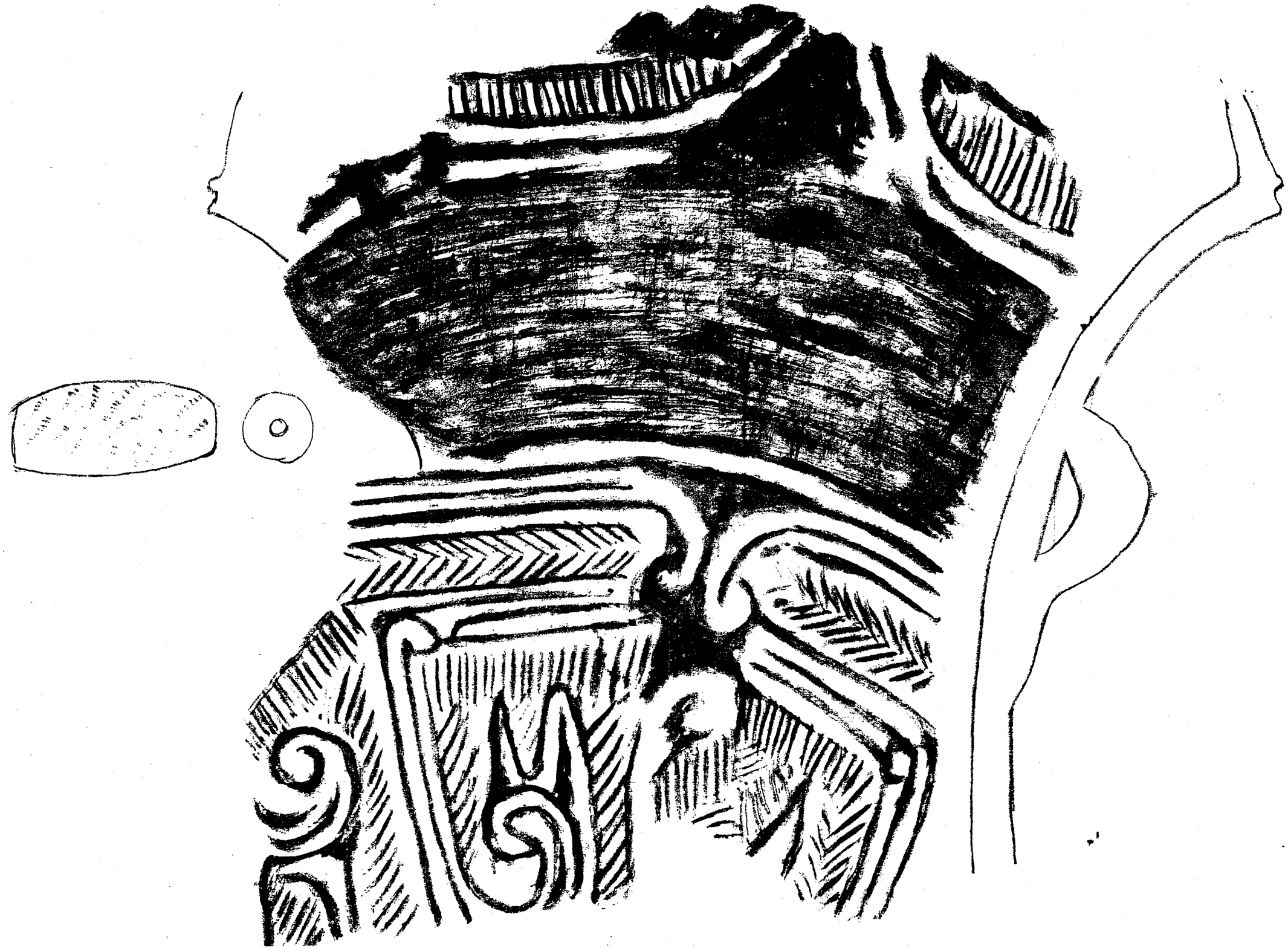
3-1

43, 3, 25 2-1



3-3

3-1



上条遺跡発掘調査

山ノ内教育委員会

所在地　山ノ内町上条中原4910番地

調査年月日　第1次　昭和42年3月26～31日
第2次　昭和43年3月29～31日

調査責任者　山ノ内町教育長　宮崎　栄

調査者　金井汲次　田川幸生　滝沢善次郎　小野沢捷
山上右八　畔上秀雄　金井正孝　中村＝郎
高社中郷土クラブ　飯山北高考古クラブ

端緒　山ノ内町統合10周年を記念し「山ノ内町誌」刊行が計画され、委員によって町内の考古資料調査が行われた。昭和40年3月末、湯本直治氏所蔵の遺物（縄文中期末土器3数打石斧2点、石皿1点）の調査によって、近隣にまれな豊富な資料の性格を把握するため2回に亘って発掘調査を実施することにしたのである。

遺跡　上条部落に所在する遺跡については「信濃考古綜覧上」によると　○四ツ屋遺跡－平地－縄文（加曽利E）　○和田（すずめん）－山麓（縄文（勝坂、加曽利E）　○上条－平地－石棒（縄文）となっている。　上条遺跡は夜間瀬川によって形成された上条扇状地の扇央やや上寄りの、小さく発達した舌状台地に立地し、この舌状台地をはさんで二つの小さな川が流れている。付近一帯は水田である。

調査　発掘調査は昭和42年3月末に6日間、第2次は昭和43年3月末に3日間実施し、第1次のものは当教委から「上条遺跡発掘調査略報」という小冊子を刊行したが、第2次のものについては目下遺物の整理中で、今年末までには略報を刊行する予定である。
第1次調査では段になっている水田の畦畔にほぼ平行して、東西へ長さ12m、巾1.5mのトレンチを入れ第1区とした。黒褐色の表土は15～20cm、表土下30～40cmから遺物の検出がはじまった。

80～90cmの黒色粘質土層からは相当量の土器片と土器を得た。表土下1mの褐色粘土層からは5個の柱穴状ピットを発掘し、小石や、土器片がピットの内に所在した。ピットの状況から住居址を想定し、第1区トレンチの北へ拡張区を設けて第2トレンチとした。しかし第2区からはピットは検出することはできなかったが、土器片、石器類を多量に得た。表にすると次のごときものであった。

土器片	土器の把手	打石斧	石鏃	凹石	黒曜石片
652	16	31	4	2	49

第2次調査では前年の南側にトレンチを長さ8m巾2mのものを設定して第3区とした。3日間の発掘によって土器片多量と石器類を得、6個のピット(柱穴状)を検出することができた。しかしピットを中心に念入りに調査したがついに住居址のプランを確認することはできなかった。

2回の発掘によって検出したピットは次表のごとくである。

ピット	1	2	3	4	5	6	7	8	9	10	11
地表下(cm)	100	80	100	100	98	70	65	58	93	80	88
プラン(cm)	55×50	60×50	50×50	45×45	45×45	27×26	16×17	20×20	58×42	38×42	32×32

住居プランの確認し得なかった一つの原因に黒色粘質土が続き土層の変化をみることができなかったためである。

遺物は第1次分は上表のごとくで第2次は土器片多量、打石斧10点、石鏃1点、黒曜石片多数と、土製品には縄文を付した管状土錘1点であった。土器類はその形態や文様から縄文中期末から後期初頭にかけてのもので、中野市大俣蛇ケ沢遺跡の遺物に近似している。しかし全遺物の整理の終っていない現在においてはまだ確定的なことは判明しない。